

# 英語動詞 GO の意味と未来時表現

— 日本語母語話者の言語習得の観点から

## 高梨美穂

Miho TAKANASHI

In this paper, we examine the meaning of the verb GO and its behavior in order to identify the research questions on language acquisition. Specially, we set the following as the targets of the study.

- (I) To observe the meanings of the verb GO and their polysemantic structures in dictionaries.
- (II) To examine the metaphorical extension of the verb GO to express times.
- (III) To observe the future time expressions: “be going to” from the aspects of school/learning grammar and research/descriptive grammar.
- (IV) To investigate the language usage of future time expressions in discourse.
- (V) To explore and concretize footholds in language acquisition.

As a result, we found the following. The meanings of the verb GO were found to be categorized into “proceeding/moving in the same state as the current situation or object,” “proceeding/moving while the situation or object is changing,” and “some change occurs in the situation or object, and it proceeds/moves. Among them, it was confirmed that we could divide them into direct indication or non-direct indication, spatial movement, non-spatial movement (time), and non-spatial movement (other).

We also found that as for (I), it is not easy to learn the usage of the verb GO if the Japanese translation is far from the English meaning, and which are confirmed to be quite numerous.

As for (II), we confirmed the relationship between space and time from Lakoff & Johnson’s metaphor theory. We re-confirmed that “be going to~” is derived from the metaphorical use of the verb GO from space to time. As for (III), we found a clear difference between the school/learning grammar and the research/descriptive grammar was how tenses were perceived: present, past, and future. (IV) We observed a broader range of gradients of meaning in actual usage of showing future: will, be going to, present continuous, which cannot be categorized simply as will, intention or simple future.

## 0. 序

日本語はアルタイ語族に属し、英語はインド・ヨーロッパ語族に属する。目標言語の語族が遠いほど言語習得の困難度は増すともいわれており、日本語母語話者が英語を学習するには、困難に感じたり、一定程度習得に時間がかかったりするのがある意味当然のことであろう。その中で、動詞 GO は母語においても第二言語においても早くに学ぶ項目で、一見、それほど難しくなさそうな学習項目であるが、日本語のそれとは意味範囲や表現方法が異なるため、学習には一定の時間がかかる項目のひとつである。GO は基本動詞であることから意味の拡張も広く、辞書を見てもその意味分類の多さに驚く。時間へのメタファー的拡張により、GO を使用して未来時を表す be going to~ といった表現方法もある。未来時制について学校文法においては、時制、すなわち未来形という枠組みから未来時表現を扱うことが多い。そして英語の未来形は主として will と be going to+原形で表現すると学習し、日本語では「でしょう」が対応訳とされることが多い。実は実際の使用場面では、日本語の未来時に「でしょう」を使用することはあまり多くなく（庵2009）、「ル形」を用いて未来を表すことが多い。

そこで、本稿では、動詞 GO の意味とその振る舞いを調べるべく、まずはその諸相を概観する。そして、GO の意味と拡張から生じた未来時表現の be going to~ と、その実際の言語使用を確認し、今後の言語習得研究の足がかりとすることを目指す。

## 1. 動詞 GO の性質と本稿における検討事項

英語の GO は汎用性の高い動詞である。GO は移動を意味する基本語彙であり、非直示と直示の側面があるため、一見シンプルに見えるが、意味においてもその使用においても非常に多岐に富んでいる。そのことから、母語習得においても、プロトタイプの意味の理解は早いのだが、大人の母語話者同様の使用レベルになるには時間がかかることがわかっている。第二言語習得においても、原義は比較的早く習得できるが、全体像を理解し、ほぼ問題なく使用できるレベルになるには一定の学習と定着時間が必要である。

GO の基本的な意味は、「〈人・動物・車などが〉(ある方向へ) 行く」であり、自己からの移動をプロトタイプとする基本動詞である。子どもは自己移動の欲求が高いと言われている (Piaget 1951, 前田・前田 1996) ことから明らかである。母語習得において、比較的早い段階で発話が見られる。Tomasello (1992) による動詞の習得研究では、生後 14 ヶ月で初語が出現した後、15 ヶ月に WHERE-GO, 16 ヶ月には GONE の初出が見られた。動作語の発話としては、GO は 2 番目で、FIND を意味する語の次であった。しかし、GO は、初出は早いが母語習得に時間がかかることもわかっている。

Clark & Garnica による実験 (1974) から, GO は 9 歳でもまだ習得過程であることが確認されている。日本語「行く」も同様に, 小学 1 年生でもまだ習得過程であり, 小学 5, 6 年生で移動を意味する「行く」の習得がほぼ完了する (Takanashi 2019) ことが示唆されている。

GO には移動直示動詞<sup>(2)</sup>という側面もある。そのため, 同じような事象であっても, 発話時, 指示時, 発話点, 到着点, 視点等によって, GO を使うか COME を使うかが変わってくる。一例を挙げよう。(1) のような事象, 「動作主がある方向へ移動する」を言語化してみる。



- (2) a. I will go to Mark's graduation.  
b. 私はマークの卒業式に行きます／行くでしょう。
- (3) a. I will come to Mark's graduation.  
b. \*私はマークの卒業式に來ます／來るでしょう。

動作主が I, そして, ある方向が Mark's graduation だとすると, (2) (3) のように言語化できる。GO を用いることも COME を用いることも可能である。どちらを選択するかは, 直示の表現方法によるもので, 何を直示的中心点に据えるかによる。例文 (2a) のように GO が選択される場合は, 話し手は自分自身を直示的中心点として発話していることになる。(3a) のように COME が選択される場合には, 聞き手がすでに Mark's graduation にいる, 話し手は Mark's graduation に対して心理的に近い感覚を持っているなどが考えられる。すなわち共感 (empathy) や敬意 (politeness/respect) などによって, 直示的中心点を Mark's graduation に置いているということである。

GO は意味の拡張も進んでいる。プロトタイプである基本的意味は上記したとおり「〈人・動物・車などが〉(ある方向へ) 行く」であるが, 直示用法と非直示用法があることから意義数も多く, 具体的な空間用法から時間的移動用法などの抽象的な用法へ意義の拡張が進んでいる。意味の多さは辞典を見ても明らかである。『ジーニアス英和大辞典』では, GO は, 自動詞での意味が 22 種類, 他動詞での意味が 10 種類に分類されている。Merriam-Webster's Advanced Learner's English Dictionary では, 27 に意味分類されている。

その中で, 未来時表現としての GO も意味的拡張のひとつとして扱われるが, その使用の条件も複雑である (Swan 2005)。母語習得および第二言語習得場面でも, 未来時表現の助動詞 WILL との違いや IF 節での使用など, 学ぶ必要がある事柄は多い。

そこで, 本稿では動詞 GO の全体像を捉え, その言語使用状

況を確認することにより, 今後の言語習得研究の足がかりを見つめることを目指す。具体的には次を行う。

- (I) 辞書における動詞 GO の意味とその多義構造を観察する。  
(II) 動詞 GO の時間および未来時表現へのメタファー的拡張を考察する。  
(III) 未来時表現である be going to~を学校/学習文法および研究/記述文法の側面から観察する。  
(IV) (III) について, 談話内での言語使用を調査する。  
(V) (I)~(IV) から, 言語習得についての足がかりを探り, 具体化する。

本稿の構成は次の通りである。2 章では, GO の意味と多義構造について, 辞書の観察および時間表現へのメタファー的拡張を考察する。3 章では, 未来時表現を文法の枠組みから確認し, be going to~の使用実態について調査する。

## 2. GO の意味と多義構造

本章では, GO の意味と多義構造を観察する。2-1. では, 辞書の項目立てから見える多義構造を確認するため, 意味分類を検証する。2-2. では, 空間と時間との関係性をメタファーから考察する。

### 2-1. 辞書に現れる GO

#### 2-1-1. 各辞書に現れる GO の多義性と意味分類数

GO の多義構造を観察していく。まずは, 辞書による意味分類から, GO の多義化がどのくらい進んでいるのかを確認する。辞書によって意味分類数は異なり, 必ずしも意味の数と分類数が対応しているわけではない。研究者や辞書編者によってその分類方法が異なるため, どの分類法を取り入れるかによって, 辞書での意味分類数が異なるわけであるが, 意味分類数が多いということは, 意味の拡張が進んでいる指標となる。

ここでは, 一般的に第二言語学習者が使用する辞書を用いる。特徴としては, 母語話者用辞書が意味を主に掲載しているのに対し, 学習者用辞書は, 意味分類とそれに対応する例文が丁寧に示されており, 対象言語の理解度が低くても比較的わかりやすく書かれている。第二言語学習者用辞書のほうが, 意味分類の解釈も比較的容易であることから, こちらを観察に用いる。

表 1 は, GO の意味分類の数を調べたものである。日本出版のものが 4 種, イギリスとアメリカ出版のものが併せて 4 種である。自動詞, 他動詞別で分類している辞書や, 小分類している辞書など, 意味項目の立て方は辞書によって異なっている。日本出版では, 自動詞と他動詞が別立てされているなどの違いが見られる。一番細かく分類されているものでは, 小分類を入れると『ランダムハウス英語辞典』の 61 分類であった。最も分類数が少なかったものは Macmillan English Dictionary for

表① GO の辞書別意味分類数

出版国	辞書名	意味分類数			小分類含む			未来含む	出版年
		自動詞	他動詞	合計	自動詞	他動詞	合計		
日本	ランダムハウス英語辞典第2版	34	9	43	51	10	61	○	1993
日本	ジーニアス英和大辞典	22	10	32	30	11	41	×	2001
日本	研究社新英和大辞典第6版	20	8	28	42	10	52	○	2002
日本	ジーニアス英和大辞典第5版	25	2	27	33	3	36	×	2014
UK	Macmillan English Dictionary for Advanced Learners the second edition			22			28	×	2007
USA	Merriam-Webster's Advanced Learner's English Dictionary			27			37	×	2008
UK	Longman Dictionary of Contemporary English the 5th edition			49			56	△	2009
UK	Oxford Advanced Learner's Dictionary the 8th edition			35			35	×	2010

\*UK および USA 出版の辞書については、自動詞、他動詞を別立てにしているため、合計のみを記している。

\*一部含まれているものを△とする。

*Advanced Learners* で小分類を含めて 28 分類であった。ここから GO の意味は非常に多岐にわたることが見えてくる。未来時表現は別立てにしている辞書も多く、また全辞書で、go out, go away のような動詞句は別立てに項目が立てられていることから、実際にはこれ以上に多い意味があるということである。

### 2-1-2. 動詞 GO の意味分類と用例を質的に確認して

ここで、*Merriam-Webster's Advanced Learner's English Dictionary*<sup>(3)</sup> による動詞 GO の意味と用例を観察する。意味分類数は 27 種類、小分類では 37 種類ある。日本語訳は筆者による。GO を日本語にした際、GO の移動を示す色合いが非常に薄くなり、「行く、移動する」などの訳を付けられないものは太字とした。また、例文の意味が直示か非直示か、空間移動か非空間移動（時間移動）か非空間移動（その他）を明記した。

(4) go [verb] (*Merriam-Webster's Advanced Learner's English Dictionary* 2008 より)

1

a : to move or travel to a place

ある場所へ移動する、または出かける

〈He went to the window and looked out at the yard.〉直示／非直示、空間

彼は窓際に行き、庭を眺めた。

b : to travel to and stay in (a place) for a particular amount of time

一定期間（ある場所へ）旅行し、滞在する

〈I went with my family to Rome last year.〉直示、空間

私は去年、家族でローマに行った。

c : to move or travel in a particular way or for a particular distance

特定な方法でまたは一定の距離を移動する、もしくはは旅行する

〈The car was going too fast.〉非直示、空間  
車のスピードが速すぎた。

2

a : to move to or be at a place (such as an office or school) for work, study, etc.

仕事や勉強などのために、ある場所（会社や学校など）に移動したり、そこに留まったりする

〈She goes to church on Sunday.〉直示／非直示、空間  
彼女は日曜日に教会に行く。

b : to do something that involves moving or traveling to a place

ある場所への移動や旅行を伴うようなことをする

〈We're going on vacation next week.〉直示、空間（未来時表現（進行相））

来週は休暇で旅行に行く（予定だ）。

c : to move or travel to a place for a particular purpose

特定の目的のために、ある場所に移動したり、旅行したりする

〈I went to see them last week.〉直示、空間

私は先週彼らに会いに行った。

d [informal] : to engage in (doing something)

[非公式]（何かをするため）に従事する、携わる

〈He went blabbing the news all over the place.〉直示／非直示、空間

彼はあちこちでそのニュースを吹聴して歩いた／風潮して廻った。

3

a : to leave a place

ある場所を離れる  
 〈It's time to go.〉 直示／非直示, 空間  
 もう行く時間だ.  
 b : to leave a job, position, etc.  
 仕事や地位から離れる  
 〈Pack up your desk and go.〉 直示／非直示, 空間  
 机をかたづけて, 行け.  
 4 : to lie or move along a particular route or in a particular direction  
 特定のルート, または方向に沿って横たわる, または移動する  
 〈The road goes from the town to the lake.〉 直示／非直示, 空間  
 町から湖に向かって道が続いている.  
 5 : to provide a way to get to a place  
 ある場所への行き方を提供する  
 〈Where does this road go?〉 直示／非直示, 空間  
 この道はどこに行くのか.  
 6 : to be sent  
 送られる, 送信される  
 〈The message went by e-mail to all members of the staff.〉 直示／非直示, 非空間  
 メッセージは, スタッフ全員にメールで送付された.  
 7 : to be lost, used, or spent  
 失われる, 使われる  
 〈I don't know where the money goes.〉 直示／非直示 (非直示のニュアンスが強い), 空間／非空間 (電子マネーなど)  
 金がどこに行くのかわからない.  
 8 : to die  
 死ぬ  
 〈She went peacefully at about midnight.〉 直示／非直示, 非空間  
 彼女は 12 時頃, 静かに息を引き取った.  
 9  
 a [of time] : to pass  
 [時間が] 過ぎる  
 〈The time/day seemed to go very quickly/slowly.〉 直示／非直示, 非空間 (時間)  
 時／日はとても速く／遅く過ぎるようにみえる.  
 b : to happen in a particular way  
 特定の方法で起こる  
 〈The evening went well/badly.〉 直示／非直示, 非空間 (時間)  
 その夜はうまくいった／うまくいかなかった.

10 : [informal] —used to talk or ask about how you are feeling 非直示, 非空間 (その他) 慣用句  
 [非公式] 自分の感情, 気持ちを話したり尋ねたりするときに使用される  
 〈“How are things going? = How's everything going? = How's it going?”〉  
 調子はどうですか. 全てうまくいっていますか. どうですか.  
 11 : to be given up, thrown away, etc.  
 手放す, 捨てる, など  
 〈I want to keep these, but that one can go.〉 直示, 空間／非空間 (その他)  
 私はこれは残しておきたいが, あれは手放してよい.  
 12 : always followed by an adverb or preposition [no obj] 目的語は無く, 常に副詞や前置詞を伴う  
 a : to be sold  
 売買される, 売られる  
 〈The house went for a good price.〉 直示／非直示, 非空間  
 この家はいい値段で売れた.  
 b : to be willing to pay a certain price for something  
 ある物のために一定の価格を支払うことを厭わない  
 〈I'll go as high as \$100, but not over that.〉 直示, 非空間 (その他)  
 100 ドルまでは高くてもいいが, それ以上は無理です.  
 13 : to fail or become weak because of use, age, etc.  
 使用や年齢によって, 故障したり, 弱くなったりする  
 〈His hearing has started to go.〉 直示／非直示, 非空間 (その他)  
 彼は聴力も落ちてきた.  
 14 : to break because of force or pressure  
 力や圧力によって壊れる  
 〈The roof is weakening and it could go at any time.〉 直示／非直示, 空間  
 屋根が傷んできているので, いつ壊れてもおかしくない.  
 15 : to start doing something  
 何かをし始める  
 〈Everyone's here, so I think we're ready to go.〉 直示／非直示, 非空間 (その他)  
 みんなが集まっているので, 始める準備は万端だと思う.  
 16 : —used to describe the result of a contest, election, decision, etc.  
 コンテスト, 選挙, 決定などの結果を表すために使用される  
 〈The verdict went against him.〉 直示／非直示, 非空間



(その他)  
判決は彼に不利なものとなった。  
17 : to work in the usual or expected way  
通常のもしくは期待される方法で働く、動く  
〈I couldn't get the car to go.〉直示／非直示、空間  
車が進まなかった／車を進ませることができなかった。  
18  
a : to become—used to describe a change  
—になる 変化を表現するときに使用される  
〈Everything keeps going wrong.〉直示／非直示、非空間  
(その他)  
すべてがうまくいかない／悪いままだ。  
b : to change  
変化する、変わる  
〈The leaves here go from green to red in the fall.〉直示  
／非直示、非空間 (その他)  
この葉は、秋になると緑から赤に変わる。  
19 : —used to describe someone's or something's condition  
誰かまたは何かの状態を表すときに使用される  
〈There was nothing to eat, so we had to go hungry.〉直  
示、非空間 (その他)  
食べるものがないので、空腹に耐えるしかなかった。  
20 [informal] : to make a particular movement  
[非公式] 特定の動きをさせる  
〈Can you go like this with your eyebrows? [=can you  
move your eyebrows like this?〕非直示、空間  
眉毛をこんな風に動かせますか？  
21 : —used to talk about a story, song, etc.  
話しや歌などについて話すときに使用する  
〈The tune goes like this.〉非直示、非空間 (その他)  
曲はこのような感じだ。  
22  
a : to be able to fit in or through a space  
隙間に収まる  
〈The box was too big to go [=fit] through the door.〉  
直示／非直示、空間  
箱が大きすぎてドアを通れなかった／通って行けなかつ  
た。  
b : to have a usual or proper place or position: BELONG  
通常の、または適切な場所や位置に据える。通常、適切  
な場所や位置を持つこと  
〈Where do your keys go?〉直示、空間  
鍵はどこにあるの。  
23 : to have authority: to require you to do what is said  
or demanded

権力を持つ。述べること、望むことを行うように要求する  
〈What she says goes! [=she is the boss; you have to do  
what she tells you to do]〉直示、非空間 (その他)  
彼女の言うことは絶対だ。  
24 [informal] : to use the toilet  
[非公式] トイレを使う。  
〈One of the children said he had to go.〉直示／非直示、  
空間  
一人の子供がトイレに行きたいと言った。  
25 : to make a sound  
音を立てる  
〈The bell went and the class came to an end.〉非直示、  
非空間 (その他)  
ベルが鳴り、授業が終了した。  
26 [informal] : to say (something) —used in describing  
what people said in a conversation  
[非公式] (何かを) 言う、述べる。会話の中で、人が  
何かを描写するときに使われる  
〈So she goes, "Did you write this?" and I go, "Mind your  
own business!"〉非直示、非空間 (その他)  
それで、彼女は「あなたがこれを書いたの?」と言い、  
私は「あなたには関係ない!」と言った。  
27 [of a sports team or player] : to have a specified re-  
cord  
[スポーツチームや選手が] 特別な記録を立てる  
〈The shortstop went two for four in yesterday's game.  
[=the shortstop had two hits in four times at bat in  
yesterday's game]〉非直示、非空間 (その他)  
昨日の試合で、そのショートは4打数2安打だった。

意味別に細かく分類されて項目が立てられているが、移動す  
る、旅行する、去るという行為を示すものが多く、1から4は  
それに当たる。移動については、直示の意味と非直示の意味に  
分けられる。ただし、実際には話者がどういった視点や直示的  
の中心点を取るかによって異なる。すなわち、文脈や場面に依存  
するため、例文からの情報だけではどちらとも判断できないも  
のがある。特に動作主が自分以外の場合には、話者は動作主が  
単に移動する事象について言及しているのか、直示的移動を含  
意しているのかの区別がつきにくい。例えば、1c, 4, 5, 6がそ  
れに当たる。時間的移動も同様である。時間が自分から遠のく  
という意味でGOを使えば直示の意味だが、単に時間が移動す  
ることを意味すれば非直示的である。9は時間的移動を意味す  
る分類である。いずれにせよ「現在の状況や物が同じ状態で進  
む／移動する」「状況や物に変化しながら進む／移動する」「状  
況や物に何らかの変化が起き、それが進む／移動する」に括ら

れる。これらは GO の持つ基本義、すなわち空間移動の意味が派生義の根底にあることがわかる。

6 の例を見てみよう。メッセージが送り手からスタッフへと移動するわけなので、表面的な意味は “to be sent” であるが、その根底には「移動」があることがわかる。7 の例は、金が話し手からどこかへ移動するわけなので、表面的な意味は “to be lost” であるが、やはり移動が示されている。25 は “to make a sound” と移動とはかけ離れているように思えるが、ベルの音がある地点で出され、それが時間移動していくという様子であるので、やはり移動が根底にあるといえる。24 は直接的表現を避けて意味を示す例で暗喩である。排泄に関することなどに利用される。ここでも移動が根底にある。子どもはただ “I have to go.” とだけ発話している例だが、トイレへ移動する、そして排泄する、の前節のみを発話して排泄行為を表している。日本語でも「花摘みに行く」などの暗喩が使われている。

日本語訳と対応しないものをまとめると①聞き手のほうへ移動する時の表現 : I'm coming. (今行きます) ②非移動、非時間の比喩的表現である。②については、小分類では 25 種類、大分類では 24 種類である。次の (5) に全て示す。全意味分類数 37 のうち、25 であるので約 68% を占める。空間移動の意味から時間移動へと、広範囲に拡張していることがここからわかる。

- (5) 1c, 2d, 4, 6, 8, 9a, 10, 11, 12ab, 13, 14, 15, 16, 17, 18b, 19, 20, 21, 22b, 23, 24, 25, 26, 27

ただし、8 については「彼は行ってしまった」のように日本語でも「死ぬ」を意味しており、日英語が対応するとも捉えられる。10 は慣用表現である。GO については多義化が進んでおり、また言語間が遠いため、多義化の方向がかなり異なっている。上述したように、この 25 意味項目は、英語の意味と日本語の意味が異なるため、習得が困難であることが示唆される。ここから見えてきたような、GO の意味的拡張には原義の移動の意味が関係していることを学習に取り入れたり、意味の拡張の方向性を図で示して学習を促したりすることが、英語学習において効果的かもしれない。

ここまで、辞書の意味分類を確認してきた。英語では、物質の空間移動という GO の基本義から、抽象的移動事象を表現する意味拡張が起こり、新たな意味となって定着している。それにより多義化が進んでいる様子がここから伺える。この多義化によって、原義から離れた意味での GO の意味を持つようになり、日本語の意味と異なってしまったことが推測できる。日本語の意味との乖離から、学習が難しくなると思われる意味分類については、今後研究が必要であろう。

## 2-2. 認知言語学的視点による GO の多義性の捉え方

認知言語学において意味拡張はメタファーを媒介すると考える。GO は具体的な空間的移動用法からメタファーを仲介して、抽象的な用法へと意義が広がっていくと捉える。そこでまず、認知言語学におけるメタファーについて紹介し、空間から時間へのメタファーによる拡張用法を確認する。

### 2-2-1. 認知言語学とメタファー

メタファーについては、古代から現代までその研究歴は長く、様々な理論が展開されてきた。日本語では隠喩や暗喩などがメタファーとして挙げられる。メタファーは修辭的な文学表現として扱われ、その枠組みから研究されることが多かったが、マーク・ジョンソンとジョージ・レイコフらは、メタファーは言語活動内だけでなく思考や行動に至る日常のあらゆるところに浸透していることを例証した。認知言語学におけるメタファー理論では、メタファーは思考過程を支配する認知メカニズムであり、またメタファーとは経験を概念化する手段である。よって、我々の思考過程のほとんどがメタファーにより成り立っていると考える (Lakoff & Johnson 1980)。

概念がメタファーによって成り立っているという Lakoff & Johnson による理論を具体的に示す。ここでは、ARGUMENT (議論) という概念と、その概念に構造を与えている ARGUMENT IS WAR (議論は戦争である) というメタファーを取り上げる。

- (6) ARGUMENT IS WAR (議論とは戦争である)<sup>(4)</sup>
- a. Your claims are *indefensible*. 君の主張は守りようがない = 弁護の余地がない
  - a' Your land is *indefensible*. 君の陣地は守りようがない
  - b. He *attacked every weak point* in my argumentation. 彼は私の議論の弱点をことごとく攻撃した
  - b' *The army attacked every weak point* in our army. その軍は我々の軍の弱点をことごとく攻撃した
  - c. His criticisms were *right on target*. 彼の批判は的を射ていた
  - c' His tactics were *right on target*. 彼の作戦は的を射ていた
  - d. I've never won an argument with him. 私は彼との議論に一度も勝ったことがない
  - d' My country has never won a battle with his country. 私の国は彼の国との戦争に一度も勝ったことがない

これらのメタファーは日常的に目にするものである。議論について語るために、全て戦争での語彙を代用している。経験的に把握している具体的な WAR (戦争) を起点領域に用いて、

抽象的なものである ARGUMENT 〈議論〉という目的領域を理解しようとするものである。(6)の ARGUMENT 〈議論〉に関する部分を a' から d' のように戦争関係の語彙に置き換えてみるとわかりやすい。単に戦争用語を用いて議論について語っているのではない。議論には現実的に勝ち負けがあり、相手は敵と見なされる。相手の立脚点(障地)を攻撃し、自分のそれを守る。戦争と同じように戦略を立てて実行するし、議論が優勢になったり、劣勢になったりする。議論の中で行うことの多くは、部分的だが、戦争という概念によって構造が与えられている。議論では、武力ではなく、言葉によって戦闘が行われるのであり、そのことは攻撃、防御、反撃といった議論の構造の中に現れている。ARGUMENT 〈議論〉の本質を、WAR 〈戦争〉という事柄を通して理解し、経験しているのである。すなわち、ARGUMENT IS WAR 〈議論は戦争である〉というメタファーが我々の行動に構造を与えているということである。

もちろん ARGUMENT 〈議論〉にしても、議論のどの側面を際立たせたいかによって、使用されるメタファーは異なる。建築物の作り上げていく側面を議論に投射したメタファーを(7ab)に示す。(7ab)は ARGUMENT 〈議論〉のひとつつ作り上げていく側面を、建築物に例えた ARGUMENT IS BUILDING 〈議論は建築物〉というメタファーである。

(7) ARGUMENT IS BUILDING 〈議論は建築物である〉

- a We've got *the framework* for a solid argument.  
しっかりとした議論の枠組みができた
- b If you don't support your argument with *solid* facts, the whole thing will *collapse*.  
確固とした事実で議論をサポートしないと、全体が崩壊してしまう

このように、メタファーの本質とは、ある事柄を別の事柄を通して理解し、経験することである。つまるところ、身体的な経験による具体的な概念領域を用いて、抽象的な概念領域を理解するのだ。概念はメタファーによって構造化され、行動もメタファーによって構造化され、言語もメタファーによって構造化されるのである。

2-2-2. 空間移動と時間との関係性 ― メタファーの観点から

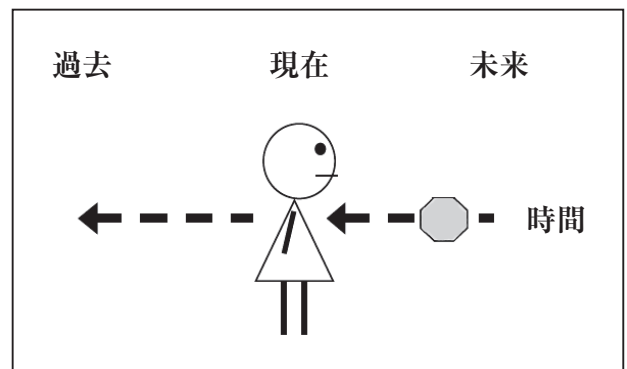
2-1-2. で示したとおり、GO は移動を基盤とする意味用法が根幹にあり、そこから意味が派生していると考えられる。移動、すなわち現実社会での具体的な空間移動を示す用法から様々な抽象的な意味へ拡張していったと考えられる。その中でも前述した辞書の意味分類にも見られるように、GO を使用して時間移動を示すことは多い。そこで、本節では、空間から時間へと

つなぐ意味拡張とメタファーとの関係を示す。

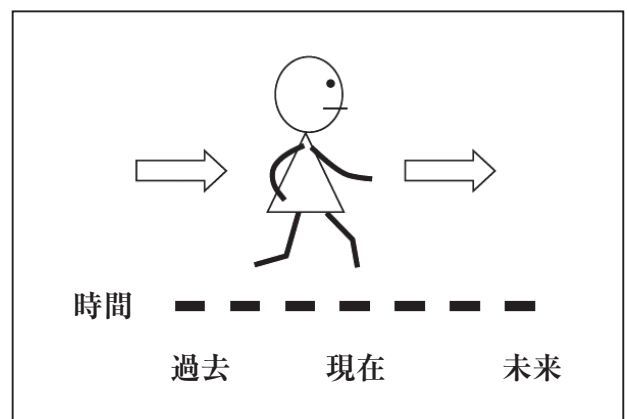
Lakoff & Johnson (1999) は、我々はメタファーなしに時間を概念化することは実質的に不可能であるとし、日常の中で非常に多くのメタファーを用いて時間の概念化を行なっていると指摘している。なぜならば、時間は物理的な方向性や質量などがなく、我々の経験の中に明確な輪郭がないからである。そのため、我々は空間移動の身体的な経験を時間移動に置き換えることで、時間の事象を把握しているのである。

空間と時間との関係性を示した概念メタファーとしては、TIME PASSING IS MOTION 〈時間の経過は空間移動である〉が取り上げられ、多くの研究が行われてきた(Lakoff & Johnson 1980, 1999; Moore 2000, 2001, 2006, 2014; Sweetser 2005; 篠原 2008)。Lakoff & Johnson (1999) は、移動と時間との関係性を、TIME IS A MOVING OBJECT 〈時間は移動物体である〉と TIME IS STATIONARY AND WE MOVE THROUGH IT 〈時間は制止しており、我々はその中を移動している〉の2種類に分類している。前者は、Moving Time Metaphor 〈時間が移動するメタファー〉であり、後者は、Moving Observer (or Ego) Metaphor 〈観察者(主体)が移動するメタファー〉である。それぞれ、図①②のように示される。

図①では、観察者は静的に時間を観察していると捉える。時間の前方は過去に対応し、時間の後方は未来に対応づけられる。言語表現では、「秋がやって来る」がそれに当たる。対して、



図① Moving Time Metaphor (篠原 2008 : 184)



図② Moving Observer Metaphor (篠原 2008 : 183)



図②では、観察者が移動すると捉えられ、観察者の前方には未来が、そして後方には過去が対応づけられる。「秋に近づいていく」がそれに当たる。

Moore (2014) は Lakoff & Johnson (1999) に対して、3 分類を提示している。Moving Ego (主体移動型) と Ego-centered Moving Time (自己中心的時間移動型) に SEQUENCE IS RELATIVE POSITION ON A PATH (順序は経路上の相対的な位置である) を加えており、これにより時間メタファーの目標領域についてより正確な記述が可能になるとしている。そして、直示性があるかという観点から Moving Ego (主体移動型) と Ego-centered Moving Time (自己中心的時間移動型) は同グループとし、SEQUENCE IS RELATIVE POSITION ON A PATH (順序は経路上の相対的な位置である) は非直示として分けている。

- (8)<sup>(5)</sup> a Summer is coming. 夏が来る  
b Fall follows summer. 秋が夏に続く。

(Moore 2014 : 71)

(8a) は Ego-centered Moving Time (自己中心的時間移動型) の例で、(8b) は SEQUENCE IS RELATIVE POSITION ON A PATH (順序は経路上の相対的な位置である) の例である。双方共にメタフォリカルな方向性の中に移動が含意されているが、(8a) は come という直示移動動詞が用いられており、(8b) は follow という非直示性の移動動詞が用いられている。また、視点についても異なる。(8a) は主体の視点が介在するが、(8b) には主体の視点は介在されず、夏と秋という二つの時間的側面の関係によって理解される。

Lakoff & Johnson (1999) においても Moore (2014) においても、時間に関する表現は、空間移動に使用する語彙によって言語化されることを提示している。そして、空間移動と時間とはメタファーの関係性を持っており、直示性、視点、主体などの関係において、何にプロファイルするかによって言語化が異なるということである。

### 2-2-3. GO と未来時表現の関係性に着目して

2-2-2. では、数多くの空間表現が時間表現として使われることから、我々が時間というものを空間移動表現を媒介して認識していることを確認した。時間は空間なのだから、空間について我々が認識している構造を、そのまま時間に当てはめていることになる。

では、GO と未来時表現との関係について取り上げたい。上述から考えても、be going to~ の go は、GO から派生した時間を空間に見立てるメタファーの一つと捉えることが自然である。空間を移動している状態を示す be going to~, すなわち

進行相を、未来に向けて時が移動している／移動をはじめた状態に写像しているため、be going to~ を使って未来を表すのと考えられる。移動を意味する進行相が先にあり、そこからメタファー的に未来表現へ派生したと言えるだろう。本多 (2015) は下記 (9) (10) のとおり、be going to~ を進行相と、未来時表現とに分けて捉えており、未来時表現の be going to の移動動詞 go は、未来の出来事へ向かうという、時間的移動を示すとする。そして、未来時表現には空間から時間へのメタファーが関わっていると述べている。

- (9) be going to に現れる移動動詞 go は、未来の出来事に向かったの時間軸上の移動を指し示す。  
(10) 進行形としての be going to... は、go to... という始まりと終わりがある出来事の途中を指し示す。

(本多 2015 : 76)

ここまで、空間と時間とはメタフォリカルな関わりがあり、未来時表現の be going to~ も同様であることを確認してきた。日本語母語話者が英語を学習する際に be going to~ によって未来を表現することを学ぶ。中学校では 2 年次の学習項目である。しかし、この表現になぜ GO が使われるのか理由を提示せずに学習するケースが多いと思われる。一般的な中学高校生用文法書を確認しても、移動動詞 GO と未来時表現 be going to~ との関係性が記載されているものは見られなかった。言語学的知見では、be going to~ は空間移動から時間移動へのメタフォリカルな派生によるという認識であるのは示したとおりである。このことから、英語教育の場面でもこれらを取り上げることで、単に文法項目を暗記させるのではなく、意味との結びつきにより、記憶として定着し易くなるだろう。今後、こういった新たな研究結果を言語学習分野に取り入れていくことが望まれる。

### 3. 英語における未来時表現——文法の観点から

2 章では、移動直示動詞である GO とその意味を確認してから、空間表現を使って時間を表現するメタファーの仕組みを概観した。そこから、GO と移動表現と未来時表現との関わりに言及した。本章では、英語の未来時表現について文法の観点から取り上げる。

#### 3-1. 学習用文法と記述的文法

始めに文法の扱いについて確認する。一般的に外国語としての語学教育で用いる文法と、言語現象の規則を記述する指標としての文法とは分けて考える必要がある。前者は外国語としての枠組みで学習者の理解を促すために言語の法則をまとめたものであり、後者は言語そのものの事象を理論的に示したもので



ある。

英文法については、安井(1966)は、語学教育における文法を学問的伝統文法と呼び、言語現象を記述するために理論化されている文法とを切り離して捉えている。三上(1967)は、学校文法を中学・高校・大学教養課程で修得するほぼ一貫した通則であるとし、構造言語学および生成文法で扱う文法とは分けて捉えている。柘矢・福田(1993)は、文法について、中学や高校で学習に用いる文法を学校英文法、言語現象を科学的に分析する生成文法の枠組みを科学英文法とし、その違いを分けて示している。未来時表現についての大きな違いと言えば、時制の扱いである。言語類型論や英語学では、英語には現在形と過去形しか存在しないと捉えている。中学校で、まず学習する未来時表現としては、will といった助動詞や be going to~ といった表現であるが、学習文法では、時制(tense)を現在形、過去形、未来形と分類しているものや、現在時制、過去時制、未来時制とするものがあるなど、文法書によって様々である。これらについては3-2以降で取り上げる。

### 3-2. 学校文法で扱う英語未来表現とその特徴

ここでは、日本語母語話者が学習する文法項目としての英語未来表現を取り上げる。中学および高校生が使用する一般的な文法書を参考に筆者がまとめた<sup>(7)</sup>未来時の表現は主に次の(11)から(17)の表現形式と用法・意味からなる。

#### (11) will+原形

未来時を表わす代表的な形式である。基本的な用法は「推量・予測」の表現であるが、1人称を主語とする平叙文においては「意志」を、2人称の疑問文では、「勧誘・依頼」などを表わすことがある。

- a It will be rainy tomorrow.
- b I will be back soon.

#### (12) 現在形

現在においてすでに確定している未来の出来事を述べる。未来時を示す副詞(句)とともに使う。

- a The bus comes at nine.

#### (13) 現在進行形

近い未来の「予定」を述べるのに用いる。その場合、従来は come, go, leave, arrive などの往来・発着を表す動詞とともに使うことが多かったが、文脈の助けによって意味が曖昧さを生じない限り、必ずしもそうした意味の動詞に限定されることなく使われるようになってきている。本来は、現に眼前で行われている動作を表す形式である。

- a I am leaving for London tomorrow.

#### (14) will+進行形

比較的近い未来のことを表わす。この形式には「意図・依頼・命令」といった付帯の意味は希薄である。したがって、もっとも純粋な未来時の表現といえるかもしれない。ただし、この形式には、継続中の動作を推定するという別の用法もある。

- a I will be playing tennis at eight this evening.

#### (15) be going to+原形

(11)と並んで未来の事柄を表現するための重要な形式である。主語の「意志・意図」が込められた表現である。無生物を主語とする場合には、話し手の「意志」が暗に示される。また、主語の「意志・意図」と無関係に用いられることもあるが、それは出来事の徴候がすでに存在していて、それがほぼ確実に起こると考えられる場合である。この形式は書きことばよりも話しことばにおいて頻用される。

- a I am going to visit my uncle at Christmas.

#### (16) be about to+原形

「今まさに~しようとしているところだ」を意味する。「現在と接した未来」の表現である。

- a The airplane is about to leave.

#### (17) be to+原形

未来の「予定」を述べるのに用いられる。この形式は、他に「命令」、「運命」または受身形を従えて「可能」を示すなど、必ずしも未来だけを表現するものではない。

- a The prime minister is to visit Canada next week.

日本での学校文法で取り上げる未来時表現を(11)から(17)の表現形式と用法・意味により外観したが、これらをどのような文法項目に分類するかは文法書や学習書によって様々である。記述文法では、英語は現在時制と過去時制のみが存在し、未来時制はないとされる。しかし、学校文法用の文法書や学習書では、記述文法ではないとされる分類で未来時が説明されているものもある。時制として、現在時制、過去時制、未来時制という分類がされていたり(Next Stage, ロイヤル英文法)、現在形、過去形、未来形と分類されたり(新・英文法類出問題演習, First Primer)するものが存在する。学習文法書で、様々な文法形式が取り上げられていると、学習者は紛らわしく、混乱する可能性もあろう。3-4で詳述するが、もちろん、記述文法にしても解釈は複数見られるため、1つに集約することはできないが、最新の研究結果を踏まえた分類と解説をここでも取り入れていく必要はあると考える。

以上、日本における学習文法について取り上げた。次に、世界中で幅広く使用されている初級用英語文法書である *Basic*

Grammar in Use を概観する。

- (18) 未来を表す be + -ing
  - a すでに調整や準備が完了し、計画されている未来の出来事を表す。
- (19) be going to + 動詞の原形
  - a 「一するつもり」のように、自分の未来や将来について、今、すでに決心していることを表す。
  - b 現在の様子から確実に予測できる未来を表す。
- (20) will
  - a 明日や来週などの未来について「～だろう」と予測する。will の予測は普通、話し手が話している瞬間に主観的に行う

本書では、未来時制という捉え方はしていない。未来を表す表現として、3分類取り上げている。まず(18)進行相、そして(19) be going to～、最後に(20) will の形で取り上げられている。取り上げる順番についても日本出版のものとは異なる。初級者用の文法書であるので、簡潔に纏められているのが特徴である。

次に同シリーズの中級用英語文法書である *English Grammar in Use* を取り上げる。*Basic Grammar in Use* では、will と be going to のみ取り上げられていたが、*English Grammar in Use* では、未来時表現として、現在形および現在進行形を使って未来を表すもの、will と shall を使って未来を表すもの、will の進行形および will の完了形を使って未来を表すものと細かい使い分けが記されている。ここでは、現在時制 (tense) ということばが使われており、未来は present tense を使って表現することができることも説明されている。これは記述文法に極めて近い説明方法である。

### 3-3. 日本語未来時表現とその特徴

日本語教育分野で、非母語話者が未来時として学習する項目について確認する。表②に示したとおり、日本語では、ルやウ、マスなどで終わる基本形と、タで終わる形が時制機能を受け持つと考えられている。日本語は現在形、過去形、未来形という形式は持たないという考え方が一般的である。日本語で未来を表すには、ル形、テイル形を用いる。それだけでは現在時と区別が難しい場合には、未来を表す副詞を併せて使用する。文脈から「学校へ行く」だけで判断が難しい場合には、「明日」な表② 時制の表現方法 (町田 1989: 152)

述語	過去		現在		未来	
	状態	非状態	状態	非状態	状態	非状態
完結相	—	タ	—	—	—	ル
非完結相	タ	テイタ	ル	テイル	(ル)	(テイル)

どを付加することで、未来時を表す。

「動詞+しょう/だろう」や「動詞+つもり」などの表現形式で推量を伴う未来時を意味する表現も可能である。英語の未来時表現と対比させるときや翻訳するときに、これらの表現形式がよく用いられる。例えば、「I will have lunch at noon.」の未来時表現を説明するときに、未来であることをわかりやすくするために「私は正午に昼食を食べるでしょう」と訳すことが多々あるが、使用に基づけば「正午に昼食を食べる」としたほうが適当である。ルやテイル形を用いると、現在との区別がつきにくいので、「動詞+しょう/だろう」や「動詞+つもり」を用いる傾向にあるのだろう。ただし、庵 (2009) は、「でしよう (だろう)」の実際の使用について、実態と伴わないとし、次のように指摘する。

「でしよう (だろう)」には推量と確認の2つの用法がある。しかし、実際の発話データを分析した結果では確認が多数派である。特に、推量の「でしよう」の言い切りの用法は極めて少ない。「でしよう」で言い切ることができるのは発話者が「専門家」である場合 (天気予報はその典型である) など一部の場合に限られる。にもかかわらず、日本語教科書では推量の「でしよう」(言い切り) は必ず導入されている。これは「体系」を重視する日本語学的発想によるものであり、「日本語学的文法から独立した」日本語教育文法という立場からは否定されるべきものである。(庵 2009: 58)

英語学習時にも実際の使用とは離れた用法や規範を学習したり、取り上げられたりすることが、未来時表現でも多く見られることは上述した通りである。日本語教育の上でも同様に、実際の使用から逸脱した表現方法を学ぶということが起きているということである。やはり、できるだけ使用に依拠し、記述的な言語表現を学習項目として取り上げるようにしていく必要がある。

### 3-4. 英語学〈記述文法〉における未来時表現の捉え方

次に、英語学、すなわち記述文法において、未来時がどう捉えられているのか、研究を概観する。

#### 3-4-1. Leech (1971) による未来時表現

Leech (1971) は、未来を表現する重要な方法を次の5つで示し、未来の出来事に与えられる確実性の度合いの高いものから低いものへと、その順序を示している。

- (21) 単純現在 (最も確実)
- (22) will/shall + 原形

- (23) will/shall + 進行形
- (24) be going to + 原形
- (25) 現在進行 (最も不確実)

加えて、be about to + 原形、be destined + 不定詞も未来表現として扱っている。

will と shall については、未来用法と法的用法とがある。未来用法には、予測と予言的用法があり、完了不定詞が後に続く will/shall は未来における過去を表現する。be going to は、現在の未来成就を意味するが、さらに現在意図の未来と、現在原因の未来とに区別される。現在意図の未来は、主として人間が主語の場合、そして意志を意識的に働かせることを含意する doing あるいは「行為者」動詞の場合に見られる。現在原因の未来は、人間主語以外にも、動物および無生物主語の場合に見られる。「行為者」および「非行為者」動詞の場合にも見られる。あたかも未来出来事にいたる一連の出来事がすでに始まっているかのような状態を示す。

その他の特徴としては、(i) 未来条件節では不適切な場合が多い (ii) 「急迫」は必要な意味要素ではなく、出来事の成就を保証しない (iii) 予期された出来事が実際に起こるにいたることを保証しない、があげられる。現在進行は、現在の計画・予定・取り決め未来、これには「急迫」がしばしば含意され、doing 動詞に限定される。

### 3-4-2. Close (1976) による未来時表現

Close (1976) は、未来時制 (future tense) を認めている。時制 (tense) を、活動 (activity) と時間 (time) の枠組みから分析し、英語の未来時制 (future tense) には、これらにプラスして法 (mood) にも関係するという。

will の区別としては、例えば “Mr Turner will leave tomorrow.” という際に、話者の主要な関心は未来の出来事にあり、一方 “Mr Turner is going to leave/is leaving/leaves/is to leave tomorrow.” では、話者の主要な関心は Mr Turner が出発することになると予想される現在の要因 (取り決め、計画、意図、その他何であれ) にあることを意味するとする。一般的な話し言葉で、will と be going to のどちらかを選択しなければならないことが、しばしば起こる。両者選択可能な時には、現在の徴候、意図、準備などが強調されているケースでは、be going to がふさわしいとし、そのようなことが強調されないか、無関係であるケースには will がよりふさわしいとする。例えば、 “The telephone rings.”, “All right, I'll answer it.” のような状況では、そのような強調を必要としないが “I'm going to answer your letter, point by point.” の場合には、前もって考慮しており、目的をもって行動し、遂行するという一連の行為を意図的に強調していることを意味する。

### 3-4-3. Declerck (1994) による未来時表現

Declerck (1994) は、未来を表す shall/will + 動詞の原形を、時制の助動詞と意志性の法助動詞の2種類から捉えている。時制の助動詞 will/shall は、純粹 (中立) な未来 (pure [neutral] future) を表し、文の主語の意志や意図に左右されないものとする。意志性の法助動詞 (modal auxiliaries) としての shall/will は、すべて意志と関係があると述べる。文脈に応じて、何らかの意志、欲望、望み、脅し、警告、意図、主張、決意などを表す。

will not (won't) は、意思を示す動詞とともに用いられると、しばしば拒否を表す。また、will you で始まる疑問文は、動詞が意志動詞である場合には、通常、要求、申し出、招待をあらわすものとして解される。

現在意図の未来における実現には be going to で表現し、主語 (受動態においては、含意されている動作主) が、未来にあることを行う意図を現在もっていることを表す。will との違いは、意図があらかじめよく考えた結果か否かである。話し手が自分で申し出たことを達成しようとするに決心している場合には、be going to を用いなければならない。よって、be going to は、しばしば、強い決意を表すことになる。そして、意図が明らかにあらかじめよく考えた結果ではない場合、すなわち、主語がその行為を行ってみようかと単に思いついたに過ぎないような場合には、will を用いなければならない。will you で始まる疑問文は、通例、未来の行為を行う意志があるかどうかを尋ねる質問としてではなく、要請、申し出、勧誘などとして解される。未来の行為を行う意志があるかどうかを聞く質問は、“Are you going to?” によって表される。

be going to には、未来の場面に関する現在の予測の用法もあり、この場合 be going to は、話し手が、現在の証拠や知識に基づいて予測を行っていることを含意し、次の可能性が区別される。

- (26) これから起こりそうなことの徴候が現在見られるため、その未来の場面が予測できる場合
- (27) 未来の場面の起源や始まりが現在にあるために、未来の場面が予測できる場合
- (28) 現在持っている知識や期待に基づいて予測がなされる場合

そして、will との違いであるが、be going to は常に、未来の場面が実現するための条件がすべて整っていることを前提にするため、その場面の実現にまだある条件が満たされていない場合は、will を用いるのが普通である。



### 3-4-4. Leech & Svartvik (1977) の未来時表現

Leech & Svartvik (1977) は、if 節、すなわち条件文と未来表現について言及しており、節の前の will/shall, be going to+原形においても意図が含意される場合があると指摘する。will/shall の使用は、意味として中立を示す場合と意図が含意される場合があるという。be going to+原形は、現在の何かが達成されたものとしての未来を表すことが多く、時には現在の意図から生じた未来を表すこともある。また、現在の他の原因から生じる未来を言い表すこともある。

そして、単純現在時制で未来を表現することもでき、この場合には (i) ある種の従属節、特に、副詞節や条件節において、未来について用いられる。または (ii) 未来の出来事が前もって暦や時間表で決まっているとか、変更できない計画の一部であるという理由で、絶対に確実と思われる場合の未来の出来事について用いられる。

### 3-5. 談話における未来時表現の使用状況

ここまで確認してきた未来時表現は、談話においてどのように使用されているのか、その状況を確認する。

#### 3-5-1. 対象とする談話と調査方法

未来時表現は談話内でどのように使用されているのか、映画の SCRIPT を資料とし、そこに現れる未来時表現を調査対象とする。具体的な対象は、未来時表現に多く使用される will/shall, be going to~, 進行形による未来表現である。日本での英語教育の現場では、映画を教材とすることが多々ある。英語学習用教材も多く販売されており、分析対象として手に入れやすいこと、日本語訳が対訳としてあること、状況、文脈が映画から確認できることから映画 SCRIPT を資料とすることにした。その中からできるだけ日常的に耳にする、自然な談話な SCRIPT として、米映画「プリティ・ブライド」<sup>(8)</sup>を資料とした。

資料から、未来時を表現する will/shall が使用されている文、be going to+原形が使用されている文、未来の意味を含む進行形が使用されている文を抜き出した。それぞれ Leech (1971) の先行研究を参考に、おおよその分類として、will は推量・予測、未来意志、依頼の 3 意味分類に、be going to は未来意図、現在原因の 2 意味分類に、現在進行形は未来の取り決め の 1 分類に分け、それぞれ内容を吟味し、別の意味を有するかを質的に調査した。

#### 3-5-2. 使用状況

本資料で使用されていた未来表現は、表 3 のとおり、107 である。will が 68 で全体の 63.55%、be going to が 23 で 21.5%、現在進行形が 16 で 14.5% であった。shall の使用は 0 であった。

具体的には、will は予測・推量での使用が 35、未来意志が

表 3 プリティ・ブライドに現れる未来時表現

未来表現	使用数	%
Will/shall	68/0	63.55%
be going to	23	21.50%
現在進行形	16	14.50%
総数	107	

\* 小数点第二位以下は四捨五入とする

28、依頼が 5 であった。be going to では、未来意図での使用が 21、現在原因が 2 であった。また、be going to+原形は、口語に使用される be gonna+原形という形式での省略形も使用されていた。現在進行形は、未来の取り決めでの使用が 16 であった。

if 節、If you guys are here any longer, they're gonna make you sign a lease. では、条件文の主節内に be going to が用いられている。これは、条件文の表す条件が現在すでに満たされているものとして扱われている場合には、その条件文の主節に be going to~ を用いることができるからである。

will においては、依頼については判別が容易であったが、これは原義に近い意味である予測・推量から派生し、意味が独立化したためと考えられる。しかし、意志も含意されていると思われる予測・推量も見られた。そして、be going to+原形についても、未来を表しているのか、現在進行形そのものを表しているのか線引きが難しいものがいくつかあった。例えば、My point is that once again, you're getting it all wrong. は日本語の対訳では「言いたいのはね、あなたは間違いをくりかえそうとしているってこと。」と訳されているが、英文を解釈すると、「あなたは間違えてとらえつづけている」という進行相の意味が強いが、そこには未来のニュアンスも含まれている。I'm closing up. についても、閉めようとしているのか、閉めている途中なのか、文字だけでは判断がつきにくい。映像を確認すると、閉めようとしている場面での発話であり、そこには進行相の意味に加えて、閉める意志も含まれていることが確認できた。

例えば、'I'll be back.' と話者が発話した場合、場面の状況、視点、音声、ジェスチャー等の情報が意味にも関係する。例えば、will をゆっくりとアクセントを置いて発話すれば、絶対に戻ってくるといった話者の意志が強く込められる。will を省略して軽く発話すれば、意志の含意を弱く表現することができるだろう。

このように、未来時の表現においては、実際の使用場面では、単に意志、意図や単純未来などに分類できない、より幅広い意味のグレイディエンスが見られる。A OR B といった必ずしも厳密な区切りが見つけられない使用もあり、若干 A より、若干 B よりのような、ある種曖昧な意味の加わり具合が確認できた。



また, will/shall, be going to, 現在進行形は, 連続的な時間の流れの一部をそれぞれ示していることから, この3種は似通っている部分があることがわかる. 日本人がこの3種類の使い分けがしにくいのは, 意図が含まれる will, be going to, 現在進行形での使用場面においてであり, 似通った部分に原因があるのではないだろうか. この点についてはより詳しく調べる必要がある.

#### 4. 結論

本稿では, 今後の言語習得研究の足がかりとすべく, 動詞 GO の意味とその振る舞いを次のとおり検証した.

- (I) 辞書における動詞 GO の意味とその多義構造を観察する.
- (II) 動詞 GO の時間および未来時表現へのメタファー的拡張を考察する.
- (III) 未来時表現である be going to~を学校/学習文法および研究/記述文法の側面から観察する.
- (IV) (III) について, 談話内での言語使用を調査する.
- (V) (I)~(IV) から, 言語習得についての足がかりを探り, 具体化する.

これにより, (I) については, 意味においては移動に関わる意味に帰結し, 「現在の状況や物が同じ状態で進む/移動する」「状況や物変化しながら進む/移動する」「状況や物に何らかの変化が起き, それが進む/移動する」に分類されることがわかった. その中で, 直示か非直示か, 空間移動, 非空間移動(時間), 非空間移動(その他)に分けて捉えられることが確認された. また, 日本語の訳と離れた使用については, 習得しにくいことが示唆され, これらはかなり多くにあたることが確認できた.

(II) については, Lakoff & Johnson のメタファー理論から空間と時間との関係性を確認した. 動詞 GO の空間から時間へのメタファー的使用が, be going to~へも派生していることを再確認した.

(III) 学校/学習文法および研究/記述文法の明らかな差は, 時制の捉え方: 現在形, 過去形, 未来形であった. それとともに, 日本での学校/学習文法とイギリス, アメリカでの学習文法とでは, 説明に違いが見られた.

(IV) 未来時表現において, 実際の使用場面では, 単に意志, 意図や単純未来などに分類できない, より幅広い意味のグレイディエンスが見られた.

これらから, (V) 日英語の対応が異なるものや訳が違うものの, 文法的に幾通りもの説明がされているもの, 記述と言語使用に乖離が見えるもの, 使い分けが明確になっていないものについては, 今後, 言語習得研究が必要であることを提示した.

本稿は, 動詞 GO を検証することにより, 言語習得研究の足がかりを模索したもので, ここから仮説が実証されたというものではない. 今後の言語習得研究に繋がる足がかりが発見されたことが今回の成果である. これらは今後の検証項目として, 研究を進めていく必要がある.

#### 謝辞

本研究は JSPS 科研費基盤研究(C)21k00509 「移動表現の母語習得と認知発達メカニズムの解明」の助成を受けたものである.

#### 註

- (1) 直示は deixis の訳であり, ダイクシスとも言う. ダイクシスは, 直示的中心(deictic center) = 〈いま・ここ・わたし〉を基準点とした表現であり, 人称詞(一人称・二人称), 指示詞, 時間表現の一部, テンス, 移動表現などがある. GO には非直示的移動と直示的移動がある. 単に物質の移動を意味するのが非直示移動としての GO であり, 直示的中心を基準とした移動を意味するのが直示的移動としての GO である.
- (2) 直示移動動詞(deictic motion verbs)は, 話し手のいる位置への求心的な移動や, 話し手のいる位置からの遠心的な移動に典型的に見られるような, 言語行為参加者(ないしは, 発話行為参加者: speech act participants: 話し手または聞き手: もしくはその位置)と関係づけられた「直示的移動」(deictic motion)を動詞に組み込んで表現するものである. 英語の GO, COME や日本語のイク, クルがそれに当たる. 直示的移動には, 話し手の「視点」(viewpoint), または, 「直示的中心点」(deictic center)が含まれていると言える(澤田 2018).
- (3) Merriam-Webster's Advanced Learner's English Dictionary はノア・ウェブスターによって編纂された Webster 辞書が根幹にある. 英語辞書としては非常に長い実績があるため, 本辞書を質的観察対象とした.
- (4) 例文 (6) (7) については, 一部を除いてレイコフ&ジョンソン(渡部他訳 1986)によるものである. a' から d' および (7ab) の日本語訳は筆者による.
- (5) 日本語は, 筆者の訳である.
- (6) 参考文献に記載した文法学習書による.
- (7) 下記の高校生が使用する文法書を参考にまとめた.  
『Next Stage 英文法・語法問題 第4版』『ロイヤル英文法 改訂新版』『総合英語 Evergreen』『一億人の英文法』『中学英文法 Fine』
- (8) 英語タイトルは, Runaway Bride である. Paramount Pictures によってアメリカ合衆国で制作され, 1999年にアメリカをはじめ, 世界各国で上映された.

#### 参考文献

- ・荒木一雄・小野経男・中野弘三(1977)『現代の英文法 第9巻 助動詞』研究社.
- ・安藤貞雄(1984)『英語教師の文法研究』大修館書店.
- ・Bybee, L. Joan. (1988). 'Semantic substance vs. contrast in the development of grammatical meaning', *BLS* 14, pp. 247-264.
- ・Clark, Eve V. & Garnica. (1974). 'Is he coming or going? On the acquisition of deictic verbs', *Journal of Verbal Learning and Verbal behavior*. 13: 5, pp. 559-572.
- ・Close, R. A. (1976). *English as a Foreign Language*. GergeAllen & Unwin Ltd.
- ・Declerck, R. (1994). 『現代英文法総論』(安井実訳) 研究社.
- ・Greenbaum, S. & Quirk, R. (1990). *A Students Grammar of the English Lan-*

guage. Longman.

- ・本多啓 (2015) 「Be Going To はどのような仕組みで未来を表わすのかについて、たどたどしく考える」『神戸市外国語大学外国学研究』第 87 巻, pp. 55-81.
- ・Hopper, J. Paul and Traugott, C. Elizabeth. (1997). *Grammaticalization*. Cambridge University Press.
- ・庵功雄. (2009) 「推量の「でしょう」に関する一考察: — 日本語教育文法の視点から —」『日本語教育』No.142, pp. 58-68.
- ・Lakoff, G and Johnson, M. (1980). *Metaphors We Live By*. The University of Chicago.
- ・Lakoff, G and Johnson, M. (1986). 『レトリックと人生』(渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸訳) 大修館書店.
- ・Lakoff, George and Johnson, M. (1999). *Philosophy in the Flesh: The Embodied Mind and Its Challenge to Western Thought*. Basic Books.
- ・Leech, N. Geoffrey. (1971). *Meaning and the English verb*. Longman.
- ・Leech, N. Geoffrey. (1976) 『意味と英語動詞』(国広哲弥訳) 大修館書店.
- ・Leech, N. Geoffrey & Svartvik, J. (1977) 『現代英語文法 コミュニケーション編』(池上嘉彦訳) 紀伊国屋書店.
- ・町田健 (1989) 『日本語の時制とアスペクト』アルク.
- ・前田富祺・前田紀代 (1996) 『幼児語彙の統合的発達の研究』東京: 武蔵野書院.
- ・栢矢好弘・福田稔 (1993) 『学校英文法と科学英文法』研究社.
- ・三上泰永 (1967) 「学校文法の一考察」『時事英語学研究』6 巻 1 号, pp. 8-13.
- ・Moore, E. K. (2000). Spatial experience and temporal metaphors in Wolof: point of view, conceptual mapping, and linguistic practice. Berkeley, CA: University of California at Berkeley doctoral dissertation.
- ・Moore, E. K. (2001). Deixis and the FRONT/BACK opposition in temporal metaphors. In, A. Cienki, B. Luka, & M. Smith (Eds.), *Conceptual and Discourse Factors in Linguistic Structures*. Stanford, CA: CSLI Publications, pp. 153-167.
- ・Moore, Kevin E. (2006). 'Space-to-Time Mappings and Temporal Concepts'. *Cognitive Linguistics 17*, pp. 199-244.
- ・Moore, Kevin E. (2014). *The Spatial Language of Time: Metaphor, metonymy, and frames of reference*. John Benjamins Publishing Company.
- ・佐藤芳明・田中茂範 (2009) 『レキシカル・グラマーへの招待』開拓社.
- ・澤田淳 (2018) 「日本語の直示移動動詞の選択原理について — 「行く/来る」の選択はどのようにして決まるのか? —」『言語文化研究』第 38 巻第 1-2 号, pp. 237-290.
- ・Piaget, J. (1951). Egocentric thought and sociocentric thought. In J. Piaget (Eds.), *Sociological studies*, pp. 270-286. Routledge.
- ・Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, N. G. and Svartvik, J. (1985). *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman.
- ・篠原和子 (2008) 「時間メタファーにおける「さき」の用法と直示的時間解釈」篠原和子, 片岡邦好編 『ことば・空間・身体』pp. 179-211, ひつじ書房.
- ・Swan, M. (2005). *Practical English Usage*. Oxford University Press.
- ・Sweetser, Eve. (2005). *Mental Spaces in Grammar: Conditional Constructions*. Cambridge University Press.
- ・Takanashi, M. (2019). 'L1 Acquisition of Japanese Deictic Verbs Iku Meaning 'to Go' and Kuru Meaning 'to Come': Focusing on Motion Event Description'. *ICLC15 Conference book*, pp. 152.
- ・Tomasello, M. (1992). *First Verb*. Cambridge University Press.
- ・安井稔 (1966) 「R. W. Zandvoort: A Handbook of English Grammar 書評」ELEC Bulletin, No. 19, pp. 46-7.
- ・安井稔 (1996) 『英文法解説』開拓社.

辞書

- ・『ジーニアス英和大辞典』2001. 大修館書店.
- ・『ジーニアス英和辞典』第 5 版. 2014. 大修館書店.
- ・Longman Dictionary of Contemporary English, the 5th edition. 2009. Longman.
- ・Merriam-Webster's Advanced Learner's English Dictionary. 2008. Merriam Webster.
- ・Macmillan English Dictionary for Advanced Learners, the second edition. 2007. Macmillan.
- ・Oxford Advanced Learner's Dictionary, the 8th edition. 2010. Oxford University Press.
- ・『ランダムハウス英語辞典』第 2 版. 1993. 小学館.
- ・『新英和大辞典』第 6 版. 2002. 研究社.

文法学習書

- ・『Basic Grammar in Use』日本語バイリンガル版, 2011, ケンブリッジ出版.
- ・English Grammar in Use, the 5th Edition. 2019. Cambridge University Press.
- ・『First Primer』2011, 南雲堂.
- ・『Next Stage 英文法・語法問題』第 4 版, 2014, 桐原書店.
- ・『ロイヤル英文法』改訂新版, 2004, 旺文社.
- ・『新・英文法類出問題演習』新装版, 2001, 駿台文庫.
- ・『総合英語 EVERGREEN』2017, いいずな書店.
- ・『スーパーステップ中学英文法』2011, くもん出版.

映画スクリプト

- ・『プリティ・ブライド』サラ・バトリオット&ジョサン・マクギボン, 1999, 愛育社.